

Global×Innovation 人材育成フォーラム 最終まとめ 骨子（案）

日本人の海外留学に関しては、令和6年10月1日にとりまとめた「Global Innovation 人材育成フォーラム 中間まとめ」の内容を基本的にベースとして盛り込むこととした上で、第5回以降の「優秀な外国人留学生の呼び込み・定着促進」及び「留学モビリティ拡大・大学国際化等を支える環境・体制整備」に係る以下のような議論を追加的に盛り込むこととしてはどうか。

【優秀な外国人留学生の呼び込み・定着促進】

<高等教育段階>

- 2024年5月1日時点の外国人留学生数は約34万人となり、過去最多を記録したが、予算が限られている中で、国の予算を使って外国人留学生を受け入れることについては、どのような人材を受け入れ、どのような活動をしてもらい、日本の大学の内なる国際化を実現するのかを明確にするなど、共生社会の実現に向けて戦略的に行っていくことが必要。
- 我が国としては、多様な国・地域から優秀な留学生を受け入れることや留学生の質向上を図ることが重要である。現状では、特定の国・地域からの比率が高く留学生の多様性確保という観点からは課題がある。特に、世界中でインドをはじめとするグローバルサウスの人々が活躍している中で、当該地域から優秀な人材を積極的に受け入れていくことが課題。
- 世界から優秀な研究者や学生をリクルーティングし、就職にもつなげることができるようパッケージ化した支援が必要。
- 政府目標では外国人留学生の定着について、2033年までに留学生の卒業後の国内就職率6割を目指すとされているが、少子高齢化の進展や人口減少が加速する中、大学がゲートウェイとなって優秀な留学生を受け入れ、卒業後に地域の中核として活躍する事例も見られており、今後、特に地方大学における優秀な外国人留学生の地元への定着促進は益々重要となる。

<初等中等教育段階>

- 高等学校段階の留学生の受け入れは、短期の交流を目的としたものが多いが、日本人児童生徒にとっても国際交流の機会となる。このため、自治体の国際部局と教育委員会が連携した受け入れを進めていくことが必要。
- また、外国人研究者や企業で働く外国人にとっては、日本に家族を連れていきたいと思える観点で、子供の教育環境は重要。留学促進の観点でも、外国人児童生徒と日本人児童生徒が共に学び合える取り組みが喫緊の課題。

【留学モビリティ拡大・大学の国際化を支える環境・体制整備】

- 多様で優秀な外国人材を日本社会に安定的に誘うゲートウェイ機能の確立と同時に、日本人学生と外国人留学生が共に学ぶ「多文化共修」や生活環境の充実等により、大学内の内なる国際化を図り、日本人学生の留学意欲の喚起・海外派遣につなげるという好循環を作るためにも大学の国際化の推進が必要。
- 海外大学との大学間交流においては、ジョイント・ディグリーやダブル・ディグリー等単位認定が伴う多様な形態の教育的価値の高い質の保証を伴った取組を進めていくことが重要。
- 海外の大学との連携による大学の国際化においては、アカデミックな連携だけでなくカルチャー交流や学生の意見発信力向上（日本のことをどれだけ発信できるかなど）、ディスカッション力の育成が不可欠。
- 留学モビリティ拡大・大学の国際化等の国際関連業務については、促進するほど手間のかかるコストセンターとなっている状況があるが、持続可能な形で進めるためには事務・教員コストをどのように確保していくのかが一番の課題。
- 国際化を支える大学の体制について、必要なコストをしっかりと確保しながら戦略的且つ自律的な体制整備を進めていくことが必要。
- 大学間交流を継続的に実施する場合に、教職員の留学に関する高い専門知識の継続性がないと、続くことが難しくなるため、関係する教職員にこれらの専門知識等の浸透・蓄積を進めていくための組織的な取組が重要。